

中国のむかし話

「王子アーツウと青稞チンカアのたね」

近藤伊津子・編

むかしむかし、チベットに
布イラ拉国があつたころのはなし。

このブーラ国はどこまでも広
い国でした。けれどもあるのは
牛と羊だけで、この国の人々
は、その肉を食べ、その乳を飲
むだけであとにはなんにもたべ
ものがありませんでした。

ブーラ国の王子アーツウは、



勇敢で知恵のある若者でした。王子アーツゥは、遠くのどこかの国には、牛や羊だけでなく、もっといろいろの食べものがあることを聞いて知っていました。そして、そういう食物をプーラ国にも欲しいものだと思いました。

ある日のこと王子アーツゥは馬を走らせ狩りに出かけ、国の果ての大きな滝のところに来ていました。

流れ落ちる滝を見ていると、とつぜん滝の中から山のように背の高い老人がでてきました。白いひげは、山の頂から川下まであり、まるで滝のようでした。

王子アーツゥは、われを忘れて見ていると、

「プーラ国の王子アーツゥよ」と老人から呼びかけられました。

その老人は、滝のようなひげをひねりながら、大きな手をさし出し、「王子よ、このプーラ国から、九十九の山を越えた百番目の山に行くがよい。百番目の山に大きなほら、あながあり、それが蛇の王の往居であるのじゃ。蛇の王の玉座の下に、青稜チンカッの、種子がかくされておる。

蛇の王は、この種子を決して人間に渡そうとしないのじゃ。いままで幾たりの人間がこの種子を求めて、そこにやって来たことか。そして、蛇の王につかまえられ、犬にさせられてしまったことか」

じっと耳を傾けている王子アーツゥに、

「おそろしくなったのかな、王子アーツゥよ」と老人はいいました。

「いいえ、少しもおそれません。その青稗チシカウの種子が手に入れば、このプーラ国は豊かになるのでしたら」王子アーツゥは言いました。

老人はそれをきくと愉快そうに大笑いしました。すると、山は腰をかがめ、滝は流れ落ちるのを忘れました。

「ようし、勇敢な王子アーツゥよ、行くがよい」老人は懐から一粒の黄色の豆粒をとり出し、

「王子アーツゥよ、この風珠かぜのたまがお前を万一の時は助けてくれるだろうよ。身に危険が迫った時は、この風珠を口にくくむがよい。すると、風のように走ることができよう。

又、もし、蛇の王に犬にさせられてしまったら、東の方向に、ともかく走るのだ。王子アーツゥよ、そうすると、一人の娘に出逢うだろう。その娘が、一緒にプーラ国にもどってくれたなら、犬から人間にもどることができるだろう。

さあ、勇敢な王子アーツゥよ、行くがよい」そう言いおえると老人は、長いひげのまま滝のうしろに姿を消してしまいました。

王子アーツゥは蛇の王のすむ山へ向って、旅立ちました。

馬に鞭あて、走りに走りました。いつしか緑の山々の色が変わり、木々の葉も落ち、こがらしの吹く頃になって、百番目の山、蛇の王のすむ山にたどりつきました。

山には、大きなほら、穴があり、そのまわりには蛇がとぐるをまいていました。

王子アーツゥはうまくほらあなにもぐりこみました。あなの奥には蛇の王が、王座でいねむりをしているところでした。王子アーツゥは勇気をふるい起して、蛇の王のねむっている玉座の下に手をのびました。そこには、あの老人の教えてくれた青稞チンチンの種子がありました。

王子アーツゥは一つかみ、二つかみ……そしてもう一回、と手を伸ばした時、うかつにも蛇の王の尾をふんでしまいました。たちまち「りんりん、ろんろん」と蛇の王の尾につけている鈴スズがなり、蛇の王は目を覚まし、

「大胆不敵なヤツ、オレの青稞チンチンの種子を盗むとは！」と怒鳴りました。蛇の王の家来の蛇が、逃げる王子アーツゥを、どっと追ってきました。

蛇の王が首をもたげて、王子アーツゥをにらみつけると、にわかには、空はかきけむり稲妻が光り、雷鳴がとどろきました。一瞬、王子アーツゥは気を失ってしまい、そして、目が覚めると自分が犬になっているのに気がきました。

王子アーツゥは老人からもらった風珠を思い出し、口に含むと、たちまち翼が生え、天高くとび上がり、羽ばたくたびに山を越えました。王子アーツゥは首に青稞チンチンの種子の袋をさげて、東の方へ東の方へと、山をいくつも越えました。

こうして、いつのまにか二度目の夏がすぎていきました。

王子アーツゥが草原の妻若ウメノという村にたどりついたのは、夏の終りの満月の夜でした。

丁度、この夜、村の草原では、この年の豊作を祝う宴会「鍋荘ゴシツヅ」がくりひろげられて

いました。

今年の「ゴーツァン」は村の長のおま三人の娘の婿選びもあるということで大そう賑わっていました。

ことに、気立もよく器量もよい末娘ウーマンの婿になりたいと、若者たちは、だれしも思いました。三人の娘は、お婿さんにあげるくだものを懐に入れ、「ゴーツァン」の踊りを舞うのです。

若者たちは三人の娘を囲みました。村人たちは草原に腰をおろし、奶茶イェンチを飲みました。

いよいよ、三人の娘は、村人たちのうたう山の歌にあわせて、軽ろやかに跳び舞う「ゴーツァン」を踊りはじめました。

一回目の踊りのあと、上の娘は、ひとりの若者に果実をあげ、お婿さんが決まりました。又、三人の娘は舞い、村人たちは歌いました。そして、中の娘も、お婿さんを決めました。

三人の娘は、三回目のゴーツァンを舞い、村人たちは三回目の山の歌をうたいました。

若者たちは、かたずをのみ、待ちました。けれども、末の娘は、だれにも果実を渡しませんでした。

末の娘ウーマンは、若者たちの人垣を分けて、入って来た犬にかけより、そっとなで、だきよせていました。いつのまにか犬の上に果物がのせられていました。

若者たちは、あつけにとられ、村人たちは口々にはやしたてました。末の娘ウーマンは

犬をお婿さんを選んだのです。

村の長は「よくも親にはずかしい思いをさせたものだ。犬と一緒に出ていくがよい。二度と村にもどるな」と怒鳴り、とうとう、末の娘のウーマンは、犬ともども追い出されてしまいました。

末娘ウーマンは、犬をつれて草原にさまよいました。末娘ウーマンの流す涙を見て、犬は「心やさしく、美しいウーマン、泣かないで下さい」と話しかけました。そして、自分は王子アーツゥであること、青稞の種子を探しに行つて犬の姿にさせられたことをはなしました。それを聞いた末娘ウーマンは、王子アーツゥのブーラ国に一緒に行くことをよろこんで承知しました。

王子アーツゥは、青稞の種子を道に播きながらブーラ国をめざして走り続けました。だんだん後の方になつてしまつたウーマンは、種子に沿つて辛ぼろよく歩き続けました。

どれだけ時がたつたでしょう。ウーマンは、どれほどの道のりを歩いたかわかりませんが、王子アーツゥの播いた青稞の種子が青い芽を出したところを通りました。やがて、立派な苗になつているところを、…そして、いつのまにか青稞の穂が黄金色に実つているところを通りすぎました。その次には、又、新しい芽が出ているところを歩きました。

こうして、どれだけ歩いたのかわからないほど歩き続けました。

もうこれ以上、歩けないと思った時、プーラ国にたどりつきました。ウーマンの目の前に犬がかけよりましたので、手をさしのべました。

とつぜん「ホーン」と一陣の煙がまい上がり、王子アーツッが、立派な若者となって現われました。

それから、ロールオの末娘ウーマンと、プーラ国の王子アーツッは、結婚しました。

こうして、プーラ国には、はてしなく広がる草原のむこうのロールオの村まで、青稞の穂が実りました。

こういうわけで、今でもチベットでは青稞からとれる粉を練って「糌粑^{ゾムバク}」を作り、まっさきに犬にお供えます。

奶茶^{マキ}と牛乳と茶をまぜた飲物

(かっこう文庫主宰)